

文学的発想における「さいはひ」

——中古物語文学に関する試論——

原 田 芳 起

一、さいはひ、とらうことば

現代のことばでは、「さいわい」は「さいわいな」と形容動詞に用い、「さいわい」と副詞に用いることの方がむしろ多い。勿論「幸福」の同義語としての「さいわい」を名詞として認める意識はあるが、実際の言語生活では、「幸福」「しあわせ」の方を使うのが普通である。その「幸福」も「しあわせ」も語としての歴史は比較的新しい。勿論平安時代には日常語彙として「幸福」「不幸」「しあわせ」「ふしあわせ」などという語はなかったから、それに当たる語は「さいはひ」「わざはひ」であった。奈良時代の「さきはひ」は、まず四段・下二段の動詞として成立し、さらに名詞に転じた用例もある。「わざはひ」についてはもっぱら名詞の例を見るが、成立にさかのぼれば動詞であったにちがいない。平安時代には「さいはひ」「わざはひ」の名詞の例しか見かけないが、中世の軍記物に動詞として用いている例があるから、潜在的には動詞「さいはひ」

は生きていたわけである。

御娘八人おはしけり。皆とりどりにさいはひ給へり。(平家・一)

・我身栄花

楊貴妃がさいはひし時、楊国忠が栄えしが如し。(平家・一・清水

炎上)

語史の事などわずらわしく取り立てたのは、今われわれが「幸福」とか「さいわい」とか「しあわせ」とか、同じように言っていてさえも言う気持の上に微妙な差が現われる事があるから、平安朝の人々が「さいはひ」という語をいかなる情感を含めて口にしたかを知るには、この語の成立、語史を一考する必要があるうと思つたからである。

「さいはひ」の語源は「さき・はふ」。「はふ」は延びる・広がるなどの意の動詞から来た接尾語。そこで「さき」だが、岩波古語辞典では、咲き・栄え・盛りなどと同根とし、「生長のはたらきが頂点に達して、外に形を開く意」と説いている。倭訓栞では「幸、

又、福を訓むも、先の字に通へり」としている。基本的には一致点のある考えである。

まつとま 大夫の心思はゆ大君の御言のさきを聞けばたふとみ (万葉・一八
・四〇九五)

つまりは絶対者の威力が外に顕現したものを、「さき」として感ずるのである。時には神の恩恵であり、時には神の威力である。

「さきはふ」(四段)は自動詞として神の靈威が人間に広がり及んでゆくことであり、「さきはふ」(下二段)はその他動詞形である。

名詞化した「さきはひ」は絶対者なる神仏の恩恵に預かること、その意味での「幸福」の意となる。

さきはひの厚きともがら参至りし正目に見けむ足跡のともしさ嬉しくもあるか (仏足跡歌)

平安時代に入っても、「さいはひ」は神仏の恩寵としてその人に与えられるものとしての榮えであると観念された。みずからの力で獲得するという考えかたは見られない。「さいはひ」の観念は、生まれる前からすでにわが身に賦与されてあるものという人間観と結ばれていた。「さいはひ」も「わざはひ」も、なべてがその身の「宿世」であった。

考えてみると、私自身の中には、そのような幸福観はそだっていなかったし、そのような意味での幸運を願う気持ちになった事もなかった。野そだちで、始めから自分に出来るだけの事で自分の思うままに生きればそれでよいという気持が強く、神仏の恩恵でという気

持になれない、不遜な人間になっていたのかも知れない。それで、言語生活の面で「御幸福を祈ります」式の祝福が日常の事になり、又、客観的人生観察の中で、運・不運がある事を否定し得なくなってきたと、天が与えたさだめがあるかのような考え方に馴らされて来た。宿世・運命の観念は、現代にもかなりな支配力を残している。われわれが平安時代の人の次のような述懐を、あまり抵抗なしに受け入れ得る事が、その証左であろう。

才学といふもの、世にいと重くするものなればにやあらむ。いたう進みぬる人の、いのち・さいはひと並びぬるは、いと難きものになむ。(源氏・総合)

才学の道に深く進み過ぎると、短命不幸になりやすいというのだから、まことに筋の通らない考えかたなのに、何となく肯定してしまふような気持が、現代人にもまだ残っている。分析しがたい偶然の原因は、宿命と考えてしまう事は、現代人なお然りである。

程々につけて、宿世などいふなる事は知りがたきわざなれば、よろづにうしろめたくなむ。すべてあしくもよくもさるべき人の心に許しおきたるままにて世の中をすぐすは、宿世宿世にて、のちの世におとろへある時も、みづからのあやまちにはあらず。在り経て、こよなきさいはひあり、めやすき事になる折は、かくてしもあしからざりけりと見ゆれど、なほ、たちまちに聞きつけたる程は、親に知られずさるべき人も許さぬに心づからの忍びわざしいでたるなむ、女の身には増す事なき疵と覚ゆるわざなる。(源氏・若菜上)

まに生きればそれでよいという気持が強く、神仏の恩恵でという気

朱雀院が女三の宮のゆくすえの事を思いわずらっている心のうちを描写したものである。宿世は知りたいたいのだが、安心出来る人に托して結婚させておけば、たとい不幸になったとしても人それぞれ宿世だからそれでよい。娘自身の過失にはならない。女が親の許さぬままに自由に結婚したら、将来幸福になる事があつたとしても、女の身としては此の上ない疵になる、という意味である。幸も不幸も宿世だから人間の意志でどうなるものでもないから、不幸になつたとしてもその人の過失ではない。幸福になりたいと願うあまりに自分を恥ずかしめるような忍びわざはしてほしくないという親心である。幸福とは何かという当時の人の考えかたがうかがえる。

「さいはひある人」「さいはひなき人」などの表現が当時の物語に多く見られる。幸福を仏神からの賦与として考えていたことをよく示している。左に引くのは、紫の上を見て玉鬘の君の印象と比較している女房右近の気持を描いたものである。

女君は二十七八にはなり給ひぬらむかし、さかりにねびまさり給へり、すこし程経て見奉るは、またこの程にこそ匂ひ加はり給ひにけれと見え給ふ、かの人をいとめでたし、劣らじと見奉りしかど、思ひなしにやなほこよなきに、さいはひのなきとあるとは隔てあるべきわざかな、と見合はせらる。(源氏・玉鬘)

「さいはひ」とは境遇とか生活状態を形状するのでなく、その人の身に生まれついている無形の或る物として観ぜられている。人徳とも異なる。容姿の美とか才能とかによって身につけたというのとは違ふ。それ以前に存在する或る物である。

ゆるわざなる。(源氏・若菜上)

二、物語構想の軸としての「さいはひ」の思想

「さいはひ」即ち幸福を、人生の最も大きな目標として、この目標への到達を、物語構想の究極に置いている作品がある。『落窪物語』などは、その典型的なものと言えよう。『源氏物語』においても、「さいはひびと」と羨ましがられる人物、たとえば紫の上とか明石の君とか明石の尼君とかを物語の主軸に据えて想を構えている。『源氏物語』といつても、いわゆる第二部、第三部では必ずしも同じではない。第一部の物語では右に挙げたような「さいはひびと」たちのそれぞれの生きてゆくすがたが中央にせり上げられて、その周辺に「さいはひ」を小さく保ってゆくという懸命な人々や、はかなく「さいはひ」を失ってしまう人々が配されているという意味で、これは幸福物語であると評してよからうと考へる。第二部、第三部では、いささか違って来ている、世の中に「さいはひびと」と言われる人、または「さいはひ」と言われるありさまに対する反省的観照が見られ、その背後に潜む人生の深奥処に立ち入ってゆくとする志向が見られるように思われる。

このように観察してみると、「さいはひ」というものを物語の中にどう据えているか、どのような位置を与えているかによって、作品の性格・基調が大きく変わって来ているように思う。

「さいはひ」を人生の到達目標に置いて、そこに到達する過程を描いてゆく事で、読者の浪漫的心情を昂揚させる物語は、文学思潮としては素朴で、それだけに健康であり、前期浪漫主義と名づけて

みる事が出来そうに思う。「落窪物語」などはまさにそれであり、「源氏物語」も第一部にはこの性格が多分に残されている。それが第二・三部になるとかなり顕著に変化を見せているように思う。平安後期の物語に見られるような感覚的唯美主義とでも名づけてみた色調が勝つて来る。そこにはもはや素朴で健康な幸福追求への飛揚は影をひそめる。

平安朝の人々の思考の中では、「さいはひ」とは、結構な身分になる事であり、この世の中に栄える事であった。世間から見ても、外がわから見ての評価であった。

現代のわれわれだと、もつといろんな幸福がある。真の幸福は何であるかというような思考が、われわれにはある。だが、平安朝の人々に取っては、内面的な悦びとか精神的満足とかをさして「さいはひ」と呼ぶ事はほとんどなかったようである。内面的な悦びと精神的満足を兼しむ事を知らなかったというのでは決してない。現代の幸福論と平安朝の人々の「さいはひ」の思考とには、次元のちがひがある事は心に留めて観察を進めたい。

三、落窪物語の「さいはひ」志向

『落窪物語』が「さいはひ」を保った人として描いているのは、ヒロインの落窪の君その人である。落窪におしこめられてつらい生活強いられて、恥辱の限りを見た女性が、想像もつかなかったような栄えを待って、左大臣の北の方となつて、思う事で出来ない事は何一つとして無くなつた時、なにびともが、この人こそ「さいはひ

おはしける」人と知つたのである。

「さいはひある」人であるという批評が、男性に対して向けられる事がなかつたとは思えないが、平安朝の物語では不思議な程女性に対して向けられている。「さいはひ」という語のほとんどがこのヒロインに集められている。それも物語の終局なる巻の四に集められている。

まず、腹ちがいの兄である少将景政が、母君に対して、妹である左大臣北の方を讃嘆して言う。

殿も北の方をいみじう思ひきこえ給ふあまりの、まるまでは来るぞ、と聞き侍る時もあり。「まるをおぼさば、この腹の君たちを、男も女も思ほせ」とこそ申し給へば。いみじきさいはひおはしける。数ならぬ景政らだに、女は見まほし、知らまほしくなむあるを、この殿は、すべて、この北の方よりほかに女はなしとおぼしたる。うちに参り給ひても、きさいの宮の女房たちきよげなるに、たはぶれに目見入れ給はず。夜中にもあかつきにも、かきたどりでぞまかで給ふ。女のをとこに思はれ給ふためしには、この北の方をしたてまつるべし。(巻四)

左大臣殿が私どもまでいたわつて下さるのは、夫人を愛されるあまりになさる事だ。夫人が、「私を愛して下さるのなら、あの母北の方の腹の君たちをいたわつて下さい」とおっしゃるからです。さいわいというものを身にそなえていらつしやる。その証拠に、この左大臣殿は、この北の方以外の女には全く目も向けられない。夫君に愛される女性というのはこの奥方のような人のことだ。

最高の男性の妻としての身の栄えと、また並ぶ人もなく夫君に愛されることと、これこそいみじきさいわいであると言っているわけであるが、この物語が、他の誰に対しても「さいはひびと」という批評を許していないのは、注意にあたいする。

次も、この少将が母君に言う所である。

母北の方の御もとに来て、腹立たせ給へる恐ろしさに、ありつるやうに、「かうかう、左の大殿の上のたまへる事しじか」と言ひて、「はかなき事なれど、人に劣るまじく故ありかしこくこそそのたまへ。心にさいはひあるものなりけり」と言ふ。(巻四)

左大臣夫人というのは、かつての落窪の君である。少将の言う所は「あの人は、ちょっとした事でも、いかなる貴婦人にも劣らず、上品で、すぐくりつばな事をおっしゃるので。さいわいびとなる下地をもとと持っているお方なのです」という意味だろう。さいわいになる人は、いかに一旦逆境に立つ事があつても、いつかは必ずささいわいになる、誰もそれを妨げる事は出来ない、という考え方が、右のことばの下に隠されている。

次は、女房たちの批評。

人々参り集まりて、さうぞき花めきたるを見るは、「大殿にうち次ぎたてまつりては、この君ぞはいはひおほしましける」と言へば、これも誰がしたてまつるぞ、御さいはひのゆかりぞかし」と、口々言ひあへり。(巻四)

「大殿」とあるのが左大臣夫人のこと。「この君」というの

は、左大臣夫人の周旋で太宰大弐の妻になり得た四の君。「四の君の幸運も、左大臣殿の奥方のすばらしい幸運につながつたにほかならない」と言っているのである。

次、世評と読むべきか。文の続きにいぶかしきがあるが、後の考えを待つ。

大殿の北の方、御さいはひを、めでたしとは古めかしや。「落窪にひとへの御袴の程は、かく太政大臣の御北の方、後の母と見え給はざりき」とぞ、なほ昔の人々はひひけるに、みそかごととも言ひける。(巻四)

「大殿の北の方の御さいはひ」とあるべき「の」文字一つは脱落であろう。始めから「古めかしや」までは草子地として読んでおきたい。終わりの方、「いひけるに」が下の句になじまない。いろいろの改訂案もあるようだが、十分に落ち着かない。

この少将の君達、一よろひになむなりあがり給ひける。(中略) 左大将右大将にてぞ、続きてなりあがり給ひける。母北の方、御さいはひ、いはずともげにと見えたり。(巻四)

この物語が巻四の終局において、右に挙げて来たように左大臣夫人(かつての落窪の夫)の「さいはひ」を繰り返して強調する事で話をとじている事は、はなはだ注意すべきであると思われる。物語は、女君の不幸のどん底を描く事で出発し、最後に女君の最高の栄え即ち「さいはひ」を描く事で終わっているのである。そこに此の物語の素材があり、明かるさ、健康さが見られる。どん底に泣く女君を描いている中でも、絶望的な暗さや不安を感じさせていな

い。わが身の不幸を嘆きながらも、人を恨む心もなく、ただ唯々諾々として継母の命令のままに働き続ける。紫式部に批評させたらこれを「いとおもりにかはかきしき人にてあやまちなかめれどすくよかに」という類に入るかも知れない。

これはやはり幼少な女性を讀者として創作された文学であると思ふべきであらう。少女小説または童話としての性格を感じさせる作品である。そこから、必然に女性の幸福を主題として、『さいはひびと』となる女性はどんな人であったかを描き出すことになったのである。

四、蜻蛉日記の場合

『蜻蛉日記』の場合、使用度数も多くなく、『さいはひ』というものの感じ方も単純である。人には宿命的な幸運・不運があるという観念が強く、不運ながわにあると思う女性としての嘆きがある。

さいはひある人のためには、年ごろ見し人も、あまたの子などもたらぬを、かくものはかなくて、思ふ事のみしげし。(上巻)

「さいはひある人」が「さいはひ」となるために、他の人が不幸を強いられる。長い間妻として過ごしても子どもが少なかったりするものだが、私もまさにそれだ、と、ライバルの藤原中正女時姫の幸運を羨んでいるのである。

たださいはひはひなかりける身なり。(中巻)

「さいはひ」のあるとないとは、彼女らに取っては所詮は「宿世」であって、抵抗しがたいものと感じられたのである。

わが一人持たる人、もし覚えぬさいはひもやとぞ、心のうちに思ふ。(下巻)

わが子の未来に期待する、それも知りたい宿世にもしやと思う弱々しさがある。

さるうちにも、いまやけふやと待たる命、やうやう月立ちて日もゆけば、さればよ、よも死なじものを、さいはひある人こそ命はつづむれと思ふに。(下巻)

自分のような不幸な人間は、なかなか早くは死なない。幸福な人間は短命になるものだ世に言うのだから、『さいはひ』と、『いのち』と、さし引き勘定になるといふ、勿論俗信だがうかがえる。

これらは、女性の弱さという位置から生まれた幸福観の典型である。

五、宇津保物語では

『宇津保物語』では、『さいはひ』を人間の意志や能力とは別に、絶対的な仏神の世界から賦与されたものと観する基本的な点は変わりはないが、その絶対的な賦課に対する人間の弱さをはかなむという気持はむしろ少ない。そこにやはり素朴さがある。

他の作品では、ある人物の一生に対して与えられた幸運の量として、『さいはひ』を考へる事がほとんどであるが、『宇津保』では、一時的な事件としての『さいはひ』、『わざはひ』の観念も現われている。これは特殊として見得るかも知れない。

さいはひあらばそのさいはひ極めむ時に、わざはひ極まる身なり。

らばそのわざはひ限りになりて、命極まり、又虎狼熊けだものにまじりさすらへて、けだものに身を施しつべく覚え、もしは、とものつはものに身を与へぬべく、もしは、世の中にいみじき目見給ひぬべからむ時に、この琴をばかき鳴らし給へ。

(俊隆)

この「さいはひあらば」は、他の用例の「さいはひあり」とは質を異にする。一時期に生じた幸福な出来事である。まさに「わざはひ」の反対概念としての「さいはひ」である。

わが親は、この二つの琴をば、さいはひにもわざはひにも、極めていみじからむ時、弾き鳴らせとこそたまひしか。(俊隆)とも言い、また同じ事を、

故治部郷は、細緒・波斯風の二つの琴を立ててのたまひしやう、「世の中、今は限りのさいはひを極めむ時、または世にいふかひなくさすらへむ時にを」とのたうびしを、(榎の上の下)と言っている。この二つの霊琴の音の響く所には天人も天下つて必ず聞くであろうと予言されている。幸福の極限に達した時には、この音楽を天人に捧げ、わざわひの極限に遭遇した時は、この音楽によって天人の救いを祈る。

ここでは絶対者の意志と人間の意志とが同一方向をさしている。絶対者の意志を信じて、みずからの意志を推し進めようとする。

右の場合も、絶対者の恩恵の結果として、人間の栄えが顕限するものが、「さいはひ」であるという点は、他の一般の場合と同じである。「宇津保」の場合でも、右の特殊な数例を除けば、絶対者の意

志は知られざるものであり、顕現した結果によって推し量られる。

ただここでは、絶対者なる仏神によって賦与されてある人それだけの「さいはひ」に対する、人間の考え方が、前項に述べた「蜻蛉日記」などに比べると、微妙に違つて来る。同じく恩寵としての「さいはひ」を先天的に賦与されていても、人間の意志如何でこれを無にする場合もある。「さいはひ」の顕現には人間の意志の関与する部分があるという、男性的思考の現れるものがある。

けち男を以つて知られる三春の高基は、極端な物質万能論者であるが、あて宮を望んで得られそうにもないので慨嘆する。

さいはひなき君にもいますがなるかな。その坊の君はいかにい
ますなる君ぞ。只今は、この右大将のぬしの子よ、仲忠とかい
ふすき者を心に入れて、夜昼遊び女すゑて、すき者にいますか
める宮に、参り給ひては、何わざはひ給はむ。(祭の使)

わしのようなお金持の所に来ないで、皇太子の妻になろうとは、よくよく幸運を無にする人だという論理である。さいわいびとになるかならないかは本人の心がけ次第、意志次第だという、面白い意見ではある。

右の発言の続きで、三春のおとはこうも言っている。

かの君さいはひおはせばここにもおはしましなむを。(祭の使)

あて宮がここに来るか東宮の所にゆくか、その意志的選択で、さいわいびとになるか、さいわいなき人になるかの、運命が定まるのだという考えである。三春のおとは非常識な人物にはちがいないが、運命への人間の意志の関与が、当時の思想の一隅に存在した事

は認めてよからう。

「さいはひ」というものが、「宿世」でさだまっていた、いかんともしがたいものではあるが、心がけではどうにかなったのではないかという嘆きには、「さいはひ」を実現するもしないも、人間の意志の関与する部分があるという思考のうかがわれるものもある。危篤の病床にあって愛子の宰相実忠を気づつかう太政大臣源実明は、

宰相朝臣、おほやけに仕うまつりぬべく、かたち・心、人には
おとらざりしかば、わが家つくべきはこれかと思ひしか。
あさましくさいはひなくて、物にあやまれるやうにて心たまし
ひもなくなりはてて、世にさてまじらはずなりぬること。(國
讓の上)

と、心の中に嘆いている。その恋をどうして思い返す事が出来なかつたか、なぜみずからの立場を考えて正常に判断する事が出来なかつたかを、責めたい気持は当然動いていると思う。そうした判断の欠如、意志の欠如を、「あさましくさいはひなくて」と嘆いているのであるから、実忠が陥つたような悲運を、人間の意志を越えた宿命とのみも考えていなかつたと見てよからうと思う。

勿論、「さいはひ」を、人間の意志でどうにもならない、宿世のなせる不可思議なものとして嘆息する場合は、もっと多い。

かうさいはひ人を、さともなき我らまで言ひわづらはししかな。(蔵開の中)

「さいはひびと」はあて宮、「さともなき」は「しかともなき」

と同じである。「このようにさいわいを極める人とも知らず、大した力もない我ら(兼雅)までが言い寄って煩わしたものよ」という文意。

かうさいはひのものし給ふべき人なれば、さもし給はずなりにたるぞ。(國讓の上)

実忠の激情もあて宮を何とも出来なかつたのも、あて宮の身に本来そなわっていた「さいはひ」の力が絶対なものだつたからだ、というのである。実忠の兄の民部卿実正の評言である。前条と同類の思考を示す。

まさよしが子どもの中には、そこのみぞさいはひはおはすれ。(蔵開の中)

仁寿殿の女御が、里邸で「物のはえありて見よげにもしなきぬ宮仕へなれば」と愚痴っぽい事を言ったのに対して、父おとどの正頼が「そなたこそさいわいびと」と教訓したことばである。その正頼のそのあとの発言は、注意にあたひする。中宮になれなかつたから物のはえなしと考えるのはよくない。よき皇子皇女たちの母となり、その皇女の一の宮に仲忠のようにすばらしい男性を婿取り、いぬ宮のような姫君を孫に持ったのは、後の位も及ばない幸福ではないかと言っている。「さいはひ」の中実についての、この物語特有の考えを示している。「さいはひ」に対する価値判断の中に、世間的地位の高下を越える何物かの存在を加えていた事になる。

これに似た思考の方向は、あて宮が女一の宮を羨んだ。

今宮こそさいはひおはすれ。見聞かひある人をひとり領し給

「さいはひびと」はあて宮、「さともなき」は「しかともなき」

今宮こそさいはひおはすれ。見聞くかひある人をひとり領じ給

ひて、使ひ人より異に從へ給ふなる。(国譲の上)

にも見られる。まだ現代のわれわれが感じるような内面的満足の幸福感というような形而上の観念とは同じでないが、世間的な位を越えた或るものにあこがれてゐる気持は認められる。

「さいはひなし」という形の嘆きは、やはり数多く見られる。

われをさいはひなく生み出で、物を思はせ給ふ。(葦開の上)

さいはひのなきものはいかがはある。(葦開の中)

わがさいはひはなく、はちを見るべき宿世のありければ、こころの年月こそあれ、かかるうき目を見ること。(葦開の下)

いでや、いとさいはひなく侍りける人にこそ。(国譲の上)

「すべて、さいはひなき物は」とて、御けしきよからねば、

(国譲の下)

この類は、宿世の抵抗しがたさ、せんかなさを嘆く点で二類をなしている。

『宇津保物語本文と索引』で一例だけ、形容動詞として項を立ててあるが、これは処理の上での問題がある。

うるさき人のさいはひなりや。(沖つ白波)

この「さいはひ」は、やはり名詞である。特殊な文型で、

いとまばゆき人の御おぼえなり。(源氏物語)

と同じ構文である。形を変えれば、

うるさきさいはひの人なりや

いとまばゆき御おぼえの人なり

などとなり得る形で、形容動詞を含んでゐるのではない。

六 源氏物語に見る「さいはひ」

さまざまに興味を感じる。作者紫式部はいかなる幸福論を持っていたであろうか。『源氏物語』の構想にかかりあつてゐる「さいはひ」の様相はどうか。

『源氏物語』においては、「さいはひ」を云々される事例は百パーセント女性の身の上についてである。当時の女性たちも、幸福について強いあこがれを抱いてゐた。幸福になりたいという思い、幸福な人への羨望、それは今も昔も変わりがないと思われる。現在の境遇が幸福とかげ離れてゐる程、幸運へのあこがれは強い。そうした若い女性や少女たちを讀者として、その夢をかなえる物語を構想する。そこに紫の上物語や明石の君物語が生まれるのである。紫の上も明石の君も、最も典型的に「さいはひびと」であつた。第一部の主流にこの二人の物語が据えられてゐる事は、こうした女性讀者たちの夢をかなえようとする素朴な浪漫主義がある事を前に述べた。同じく第一部でも、いわゆる帚木系の物語群では、比較的に幸福に恵まれなかつた女性たちが、それぞれの分に応じての小さな「さいはひ」を、いかにして保ち続け、あるいはそれを保ち得ずに失つてしまつたかを、細緻な観察を加えながら語り出していると思ふ事も出来るであろう。この方では、女性の幸福という問題については反省的であり、かつ現実的である。

物語において「さいはひ」が云々されるのは、自覚される幸福ではなくて、世間の眼で外面的に捉えられた幸運、ないしは幸福であ

った。人生における幸福が何であるかが問われるような所はほとんど見られない。

「帯木」の巻の品定めの中で、中流階級の女を論じて、

宮仕へに出で立ちて、思ひかけぬさいはひ取り出づるためしども多かるべし。

と言っている、この「さいはひ」は、貴人の寵愛を受けるとか、好い結婚をするとか、その類の幸運をさす。かく世間的に捉えられる「さいはひ」は、必然に意外性がつきまとう。「思ひかけぬ」という条件が、世間の眼に幸福を認めさせるものである。こうした「思ひかけぬさいはひ」は浪漫的な物語を生み出すものであるが、現実の人生での追求目標になるものではなからう。幸福には形も影もなく、全く見る事も知る事も出来ないものである。貴公子源氏の君の思わぬ求愛に遭遇した空蟬の女君は、むしろその幸運の影におびえていた。彼女の内省のこぼれ、

「いとかく品定まりぬる身の覚えならで、過ぎにし親の御けはひとまれるふるさとながら、たまさかにも待ちつけ奉らば、をかしようやあらまし。強ひて思ひ知らぬがほに見消つとも、いかに程知らぬやうに思すらむ」と、心ながら胸痛く、さすがに思ひ乱る。「とてもかくても、今はいふかひなき宿世なりければ、無心に心づきなくてやみなむ」と思ひはてたり。(帯木)

を見ると、彼女がなぜ世間的には無上の幸運とも思われる源氏の君の求愛をこぼんだかの心情的理由がわかる。現在の自分の身の品の程を思い、「言ふかひなき宿世」に従うほかはないと思う。極めて

理性的な覚めた判断がそこには見られる。そうした彼女の生きかたが、物語の描こうとした所であるように思われる。帯木系の物語群が描く所の世界は、空蟬にしろ、常陸の宮の姫君にしろ、はたまた玉鬘にしろ、彼らの「さいはひ」への道を辿るものではなかった。読者の浪漫的心情を煽るものではなかった。むしろ困難な境遇の中で生きてゆく女の姿のさまざまに照明を当てたものと言えよう。

だが、若紫系の物語群の中軸をなしている紫の上と明石の君とについては、話の初めから、読者に未来の光明を予測させるような形で出発している。この二人は、まぢがいなく「さいはひ人」としての宿命を負うて登場している。宿世は知りたいたいものであるが、読者は予めこの人々のためた宿世を信じさせられているのである。

紫の上は、幼い女子としての初登場の時から、紫のゆかりむつまじい若草として、源氏の心を強くとらえ、常に源氏の執心を通して物語られてゆく。この時から連続的に物語の中軸的位置をしめてゆく。

明石の女君の物語への伏線が、早く「若紫」の劈頭において用意されていたという事は、構想を研究する上では、極めて注目すべき事である。最初からこの二人の「さいはひ」と「相関連させて想を構えたものである事を示しているのである。作者の脳裡には早くから明石の君物語の着想があった。勿論、紫の上物語の着想も本来的なものであった。作者はこの二つを相補的に関連させ、二つが一つになって、さいはひびと、物語が完成するものとしたのであろう。紫の上に与えられなかったものを明石の君が補い、明石の君に

程を思い、「言ふかひなき宿世」に従うほかはないと思う。極めて

う。紫の上と与えられなかったものを明石の君が補い、明石の君に

欠けたものは紫の上によって与えられる。

西の対の姫君の御さいはひを、世人もめできこゆ。少納言なども、人知れず、故尼上の御祈りのしるしと見たてまつる。(さ

かき)

人々も西の対の姫君の幸福を天賦のものとして見ている。宿世のすぐれた人の「さいはひ」は、誰かの意志で抑える事も摘み取る事も出来ない、此の世ならぬ何者かを秘めている事を感じさせる。

まま母北の方などの「世にはかなりしさいはひのあわたたしさ。あなゆゆしや。思う人々かたがたにつけて別れ給ふかな」とのたまひけるを、(須磨)

急に幸福になった人は、また急に不幸な目を見る事もあるという、超越的な運命論的な思考がこの継母のような人の中にはある。紫の上こそは、どの点から見ても申し分のないさいわい人である。世間の人にとって、此の人の印象は強烈であった。その晩年、

「生けるかひありつるさいはひびとの、光失ふ日にて、雨はそほふるなりけり」とうちつけごとし給ふ人もあり。また、「かく足らひぬる人は、必ずえ長からぬことなり。何を桜にといふふるごともあるは。かかる人の、いとど世に長らへて世のたのしびを尽くさば、かたはらの人くるしからむ。今こそ二品の宮は、もとの御覚えあらはれ給はめ。いとほしげに圧されたりつる御覚えを」など、うちささめきけり。(若菜下)

世間の人々が、この紫の上を最大の「さいはひびと」て見ていた事を示している。「光失ふ」という表現を取って用いたのは、此の

世のなみなみの人とは見ていない程の評価を与えていたと言える。

明石の君の幸運は、いうまでもなく源氏の君との出会いから始まる。その事だけでも、父入道の年ごろの祈願の結果であり、分に過ぎる程の幸福と思われた。

男の御容貌有様、はたさらにもいはず。年ごろの御行なひにいたくおもやせ給へるしも、いふかたなくめでたき御有様にて、心くるしげなるけしきにうち涙ぐみつつ、あはれ深く契り給へるは、「ただかばかりをさいはひにてもなかやまざらむ」とまで見ゆめれど、めでたきにしも、わが身の程を思ふも尽きせず。波の声秋の風にはなほ響き異なり。(あかし)

この人の幸運は、その腹の姫君の誕生、成長によって、どんどんふくれあがつてゆく。その姫君が将来の后あきがねであるという事で脅威を感じている内大臣(「帚木」の巻の頭中将)は嘆いて言う。

「さいはひにうち添へて、なほあやしうめでたかりける人なりや。おいの世に持給もちたまへらぬ女子をまうけさせ奉りて、身に添へてもやつし居たらず、やむごとなきに譲れる心掟、こともなかるべき人なりとぞ聞き侍る」など、かつ御物語きこえ給ふ。(をとめ)

「めでたかりける」と言ったのは、その心掟のすぐれている事を賞めたのである。不思議な程の琵琶の名手だと言うし、その腹の姫を紫の上に譲った心根などは、驚嘆のほかなしというわけである。内大臣は続けて言う。

「女はただ心ばせよりこそ世に用ゐらるるものに侍りけれ」

など、人の上のたまひ出でて、「女御を、けしうはあらず、何事も人に劣りては生ひ出でずかしと思ひ給へしかど、思はぬ人におされぬ宿世になむ、世は思ひの外なるものと思ひ侍りぬる。この君をだに、いかで思ふさまに見なし侍らむ、東宮の御元服ただいまの事になりぬるを、人知れず思う給へ心ざしたるを、かういふさいさひびとの腹の后がねこそ、また追ひすがひぬれ。立ち出で給へらむに、ましてきしるふ人あり難くや」とうち嘆き給へば、(をとめ)

この内大臣は娘の弘徽殿女御の立后を期待していたが、源氏の太政大臣が後見する梅壺の女御に庄されて負けてしまった。次の御代にはもう一人の娘(雲居雁)を后候補にと思っているが、明石の君のような「さいはひびと」の腹の姫君が成長して来るから、競争しがいだらう、という事である。

「さいはひ」というものは、まさしく宿世によって支配されるものであるが、それを顕現するための重大な要素には、「心ばせ」がある。母としての明石の君の心ばせのためたさは、その腹の明石の姫君(後の中宮)の運勢を予測させる。「宿世」は不可視なもの、知りがたきものだが、人の心ばせは察する事の出来るものである。

人生において、「さいはひ」だけがすべてでないという反省は当然やがて起こって来るであろう。のみならず、その「さいはひ」を長く保つためにも、心ばせのかしこさめでたさこそ望ましいものである。

六条の御息所腹の前斎宮、源氏のおとどの後見で中宮に立たれた、秋好む中宮と、物語の便宜上呼んでいる。比較的不遇に見えた年月の後の幸運が世間を驚かした。

とりどりに思し争ひたれど、なほ梅壺の給ひぬ。御さいはひのかく引き変へすぐれ給へりけるを世人驚ききこゆ。(をとめ)
だが、この中宮が世に重んぜられたのは、むしろその人がらであったと語る事も忘れていない。

五六日すぎて、中宮までさせ給ふ。この儀式、はたさいはいどいところせし。御さいはひのすぐれ給へりけるをばざるものにて、御有様の心にくく重りかにおはしませば、世に重く思はれ給へる事すぐれてなむおはしまける。(をとめ)

「若菜下」に主人公の言葉として、
「…心によりなむ、人はともかくもある。掟て広きうつはものには、さいはひもそれに従ひ、せばき心ある人は、さるべきにて高き身となりても、ゆたかにゆるるべるかたはおくれ、急なる人は久しく常ならず、心ぬるくなだらかなる人は長きためしなむ多かりける。」

というのがある。
「浮舟」の巻にも、これとやや相似た思想をうかがわせる詞章がある。

「昔も今も、物念じしてのどかなる人こそ、さいはひは見果て給ふなれ」

これは浮舟に仕える女たちが、性急な気持にならずに、のどやか

ある。

に薫の殿をお待ち申すべきだと勧告した言葉の一部である。
何が最後に幸福になるかは、人間の知恵では測れない部分が多いのは確かだが、すくなくとも「さいはひ」を「見果て」るための心ばせというものはありそうだ。『源氏物語』の構想の第二部・第三部と進行するに従って、こうした幸福の周辺への模索が見られるように思う。

(本学教授・学長)

これは浮舟に仕える女たちが、性急な気持にならずに、のどやか